

# 学位論文要旨

保健医療学研究科

保健医療学専攻

平成30年度入学

氏名 手島 遼太

学位論文研究指導

教員氏名 小山 浩司 准教授

学位論文題目: 高校男子サッカー選手における腰痛と姿勢に関する研究

学位論文の内容要旨(1,000字以内)

本研究では、高校男子サッカー選手の姿勢に着目し、高校男子サッカー選手の腰痛の要因について明らかにすることを目的とした。

第2章では高校男子サッカー選手291名を対象に自己記入式アンケートによる腰痛の調査を行った。過去1年以内の腰痛発生割合は、27.5%であった。また、ポジションによる腰痛発生割合の比較では、MFが他のポジションに比べ有意に低値を示した。

第3章では、高校男子サッカー選手90名(非腰痛群:n=58, 腰痛群:n=32)を対象に、身体特性(関節可動域および脊柱アライメント)の測定を行い、腰痛に関連する因子について調査を行った。その結果、腰痛と関連性を認めた項目として、立位時の過度な胸椎後弯角度および非利き足(軸足)側の股関節伸展可動域の制限が腰痛と関連性を認めた。

第4章では、第3章の対象と同様であり、高校男子サッカー選手の腰痛と姿勢について、脊柱アライメントの変化および体幹深層筋の収縮率に着目し調査を行った。その結果、脊柱アライメントの変化として、非腰痛群では胸椎後弯角度(TKA)と腰椎前弯角度(LLA)の間、LLAと仙骨傾斜角度(SIA)の間に有意な相関関係を認めた。しかし、腰痛群ではLLAとSIAのみ有意な相関関係を認め、TKAとLLAの関係性を認めなかった。腰痛群においてTKAとLLAの間に関係性が認められなかった理由として、第3章の腰痛との関連性における過度なTKAを認めたことが原因として考えられる。また、脊柱アライメントにおける前屈時の変化量(U-F)および伸展時の変化量(U-B)では、非腰痛群においてLLAとSIAの間に有意な相関関係を認めた。しかし、腰痛群では、LLAとSIAの間に相関関係を認めず、TKAとLLAの間に有意な相関関係を認めた。腰痛群においてLLAとSIAの間に相関関係が認められなかった理由として、腰部多裂筋の収縮率が低下したことにより、腰部の支持性(特に骨盤前傾)が保持できないために、相関関係が認められなかったのではないかと考えられる。